

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十五年六月一日発行（毎月一回二日発行）
第十卷第二号（通巻第一〇〇号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第110号

6. 2003

PDF制作

俳誌のsalon

古稀

品川 鈴子

しじみ蝶古稀のやつしはさりげなく

玉虫に這はれ掌こそばゆし

城山の玉虫螺鈿よりかがよ耀ふ

髭の先まで玉虫の七光り



裏返る玉虫金の蛇腹曲げ
眼も碧き玉虫の界いかならん
鶯の糞袈裟懸けに親鸞像
青梅雨の本陣和宮寄りし
生垣の赤芽小路に寺と蔵
杉菜摘む大阪駅の植ゑ込みに



玉鈴吟

兵庫 坂口三保子

海苔粗朶を抜きて拵がる伊勢の海
用済みの海苔粗朶積みて浜で焼く
白子港漁船のマストに初燕
音立てる流れ見つめる誓子の忌
啓蟄の芝生を歩む愛子様

愛媛 鈴木てるみ

交替す遅日のバスの運転手
古布の服紋を背にして花の下
バーバリーのゴルフ帽子で汽車通路
春麗スニーカーまでペアーとして
上陸の島姿見す寒の暁

香川 陶山 泰子

老木に尋ねたきこと冬日向
寒鳥乱入したる交差点
鬼やらい誰にも怖き人のいて
春一番時々忘る句読点
鳥の恋男の化粧品売れて

愛媛 武司 琴子

梅林丸太ん棒の二人席
海苔粗朶の黒の艶増す燧灘
日溜りに又もまどろむ孕猫
次ぎ次ぎと増え薬草のつくしんぼ
戻り寒誰も来ぬ日のハーブティ

大阪 竹下昭子

受話器より入院の日を春かなし
春燈し一氣に癌の本読めり
お百度のこより売る人着ぶくれて
祈祷師の春の障子の影の声
春愁の解けて安堵の受話器置く

和歌山 田中嘉代子

冬帽子嬰の福耳はみ出せり
蓮根掘る堀に沿ひ行く葬の列
水温み鬼の洗濯岩洗ふ
雛の膳運び雛と眼を合はす
セニアカー逃げ水追へど追ひつけず

兵庫 田中 敏文

春寒し生体検査のバネの音
春禽の食パンコの字に耳残す
駐車場右往左往の納税期
戻れば露店片付く彼岸道
反戦のシュプレヒコール春寒し

大阪 谷 泰子

もぐさ屋の今も手作業春寒し
悴みし手の経穴に試し灸
京極家の累代の墓冴返る
本陣を逸れて野に摘む露の薑
中山道春田を左右そに分かちけり

愛媛 筒井圭子朗

殺生重ねし獵銃仕舞ふ天井裏
引導を渡す一喝冴返る
結び目のなき渦潮が渦を解く
砂置場覆ひのテント東風が剥ぐ
青年遍路野宿で通し結願す

兵庫 内藤三男

一湾の向うは紀の国梅は二分
湾を出る船春潮を捲き上げて
白魚の目の句読点メール打つ
綱とりし力士に故郷の黄砂来る
耕耘機舗道に春泥こぼしゆく

大阪 中島 霞

指折りてつむぐ言の葉笹子鳴く
子らと折る紙の飛行機日脚伸び
風鐸のガロンガロンと涅槃にし西風
ものの芽に触れゆく風のきなくさし
立札は魚釣禁止水草生ふ

大阪 中田 征二

瀬戸内へ魚島時の船出かな
東風吹かば船足軽ろき燧灘
春暁や遠き視線に妣の在
今は昔雛壇点す和蛸燭
春風や伊予の真中の小京都

薬草歳時記

(一〇九)合歡木(ネムノキ)

八木紀子

象瀉きさかたや雨せいしに西施が合歡の花

松尾 芭蕉

何時もの事ですがネムを書くに当り「合歡はどこ?」と鉦太鼓で大騒ぎ。何せ幼い頃、一度二階の窓から茂る大木の合歡の花を見て驚いたきりですから…不思議な事に次々と見つかるもので六月広島、花盛りの合歡、七月北志賀高原は花に程遠い合歡木と言った具合。

北海道南部、本州全域、東南アジアと広く日本が分布の北限で落葉喬木です。葉は多数の羽状複葉で夕方、小葉が閉じ垂れる頃、淡い紅色の美しい羽毛のような無数の雄しべを持つ花が咲き、朝日を受けて葉が再び開く頃、花は萎れる。眠りの木より名を合歡木(万葉集でネブ)。

マメ科の変わり者で普通花弁が蝶形花に対し、緑のネムの花は合弁で小さく目立たず秋立つ頃、サヤエンドウに似た豆果をぶら下げて成熟するとききれいな淡い褐色の楕円形

種子が出来ます。

木はきめ荒く柔軟で粘り強く屋根板などの材料。

樹皮を生薬名合歡皮ごうかんひ、花を合歡花ごうかんかと呼び鎮痛・鎮静・利尿・強壯・驅虫薬として不眠、打撲、腰痛、捻挫等に湿布、浴剤、漢方で合歡湯ごうかんとうとして用いる。生の緑葉は染色に。葉を焼くと芳香ありで線香に使用。我家では近所の造園さんから頂いた白花の合歡が健在です。

小児科医院を開き早や20数年の月日があつという間に過ぎました。ある日、医院で合歡ねむと言う女の子の名を見て尋ねました。「どなたがお名前をつけたの」「私です。人と人との出会いが合歡ねむの出合いであるように…」と、故あつて母と子とで育つた若いママは微笑んだ。丸々と太つたかわい合歡ちゃん。ママの願いが叶いますように。

荒れ地にも強い大木の合歡は蹴飛ばしても平氣の風情ですが、葉は手の指のように開き更に小葉が分かれ太陽の恵みを目一杯受け仕事が終わる夜は眠り、花と交代。木の持つエネルギーを実に効率良く使う様子は恰かも弱い人間が己の弱さを自覚し無理せず大事に生活し丈夫で長持長生きの姿に似ている気がします。合歡木は賢い智者の美人風情なのかも…。

参考文献

「日本薬草全書」

新日本法規

「植物の事典」

東京堂出版

著者略歴

神戸薬科大学卒

ネムノキ (ネブ、ネビ、ネムリノキ) [ネムノキ属] (まめ科)

Albizia julibrissin Durazz.

合歓木、合歓



須賀悦子画

花



薬用部分：樹皮
(合歓皮)
(ゴウカンヒ)



豆果



E. S.

雨の日やまだきにくれてねむの花

与謝 蕪村

合歓咲くや七つ下りの茶菓子売

小林 一茶

きりきりと眠れる合歓に昂すはるかけ

川端 茅舎

谷空にかざして合歓のひるのゆめ

長谷川 素逝

合歓いまはねむり合はすや熱の中

石田 波郷

真すぐに合歓の花落つ水の上

星野 立子

どの谷も合歓のあかりや雨の中

角川 源義

誰彼もほとほと老いき合歓の花

加藤 楸邨

合歓の花沖には紺の潮流る

沢木 欣一

そぞろ行く人影のあり合歓の花

大井 邦子

鈴の奏

品川 鈴子 選

ぼっかりと空きし週末残る鴨 愛媛 年森 恭子

手際よく雛飾る娘になりにけり
春の風邪言葉の棘が抜けなくて
身丈ほど志も高くなり卒業す
枝垂梅枝先地まで後五寸 愛媛 佐々木スガ子

猫の鈴程の蕪の一夜漬
ゆうもあを交じえ法話の初大師
春耕の底土やっとな陽を見たり
梅の鉢値切り上手に抱えられ 京都 中崎 敬子

春淡し「ピーコの墓」と黒き文字
探梅や終着駅に野の香り
雛あられ男病室配膳に
流水に一湾を開け渡しけり 愛知 市川十二代

湿原の低き場所より鶴帰る
防風掘るさらさら砂の砂金めく
山寺の巻き雛古ぶ涅槃の図
躰系抜かれしごとく卒業す 香川 辻 雅子

陽炎へり近くて遠き隣組
寄書に「主役」と書いて卒業す
梅の木の見得を切ったる反り加減
筆ぐせを又直されて二月尽 兵庫 古林田鶴子

風荒し牡丹の芽ぶく漁師宿
末っ子の背丈抜きでて卒業歌
大漁や吹雪の浜に糶の声
初蝶の行きつ戻りつ風かすか 大阪 弓場 赤松

涅槃雪水に戻りて師も浄土
恩師逝き泪と酒に弥生尽
鐘響くザビエル堂へ花の坂
春近し姉ちゃんと呼ぶホスピス棟 兵庫 水野 弘

生かされし器械で呼吸寒夜かな
群れる鳩首をちぢめて日向ぼこ
日矢の伸ぶ湖面に揺れる鴨の群れ
撮影はならじと京の白障子 兵庫 谷口 蔦子

裸木の大きなこぶに雨あられ

芽柳のしだれも軽き映画村
ちやんばら横町古き旅籠に風花す
着膨れてバスを降り立つ草千里
踏みしめる高千穂溪谷春隣り
卒園の先生に書く孫の手紙ふみ
涅槃西風忌明けの義姉あねの唄聞こゆ
介護五の母も贈らる雛あられ
ぎんねずの春の雨ふる誓子墓
反戦の祈り昂ぶる受難週
時計台刻々きざむ卒業期
十七の娘にも言ひ分茨の芽
先代の一目惚れ談木の芽味噌
陽炎や恋は半分つくりごと
母の手をほどき駆け寄るつくしんぼ
糶待ちの鮑反り身にフラメンコ
新横綱迎ふ寺町梅盛り
大楠へ交々に鳥来て雨水
梅の園嬰の視線は鳩を追ふ
袖広げすくと立ちたる稚児雛
 positioning 賞ひて伸びる名草の芽
春泥を跳びて試験に受かりし日

大阪 早川 周三

兵庫 岡 有志

香川 大谷ゆかり

大阪 野口喜久子

兵庫 岩崎可代子

客寄せの桜満開百貨店
切り爪に少し残りし春の土
夕東風の洗濯物は生乾き
税申告いくら戻ると妻は問ふ
誘われて農具市行き義父不在
赤セーターを選る還暦を賜わりて
新雪に子連れ狸の跡残す
そゝくさと立話切る寒波急
雪道の帰途に見出す吾の跡
饅めだ好きの少々早き分葱抜く
庭園の跨ぐ小流れ水草生ふ
耕して土に還らぬもの出で来
忌ごもりに花となりたる露の臺
フィヨルドは霧の動きに見え隠れ
旅長し新月何時しか満月に
アホウドリ南海の空悠々と
自信なき沖釣に出て鯛かゝる
小鉢蘭立春になお色褪せず
薄氷の神水を汲む老夫婦
孫遠しせめて蛤すまし汁
春寒や京の豆屋の梁高き

兵庫 佐方 敏明

トロント 恩塚 典子

埼玉 岡田 章子

小田 知人

片瀨 清子

中村 和江

秀 鈴 記

巻頭三句 品川 鈴子 評

四句〜十五句 市橋 章子 "

* 選句は全て 品川 鈴子

手際よく雛飾る娘になりにけり 年森 恭子

幼い頃から親子で一緒に雛飾りをしたので、今ではさつさと率先して飾れる程に成長した。

我が子の手順の良さに目をほそめ、満悦しながら見守る母親。親を鏡としていつのまにか家庭的な娘になっていた。これこそ育て甲斐。

猫の鈴程の蕪の一夜漬 佐々木スガ子

蕪の浅漬は美味しいもの、ましてまだ若いうちに抜いて初物を食べるのは贅沢。

大きさの比喩が的確で可愛らしい。猫のいる暮らしの温かさを感じられる。

梅の鉢植切り上手に抱えられ 中崎 敞子

鉢植えの梅を買って抱えると、改めてずっしり満足感に浸れる。それと言うのも買手手の駆け引きの巧みさで、意外な安値となり、誰もが羨む程の良い買得品だから。

防風堀るさらさら砂の砂金めく 市川十二代

歳時記での防風は浜防風のこと。海辺の砂地に張りつくように生えている。セリ科の多年草で根は太く長い。砂をかき分けて掘り出し、食用・薬用にする。春先の新芽、若葉は軟らかで刺身のつま、酢の物にして、その独特の香り、辛味を楽しむ。春の海辺の楽しみ事。砂金めくとは、とてもきれいな砂浜なのでしょう。春の日差しを受け、きらきらさらさらと海砂の感触が伝わってくる。

(以下略)